

愛と律法

十二使徒定員会

ダリン・H・オークス長老

神の愛は神の律法と神の戒めを取って代わるものではありませんし、神の律法と戒めの効力は、神の愛の目的と効力を減ずるものではありません。

わたしは神の愛と神の戒めについて話すようにという強い気持ちを感じました。わたしのメッセージは、神の普遍かつ完全な愛は福音の計画に伴うすべての祝福の中に示されているということです。これには神のえり抜きの祝福は神の律法に従う人々のために備えられているという事実も含まれます。1 これらは子供たちを愛し教えるように両親を導く永遠の原則です。

I.

まず4つの例を提示します。これらは愛と律法の間には若干この世的な混乱があることを示すものです。

●同棲をしているヤングアダルトが、悲しんでいる両親にこう言います。「わたしをほんとうに愛しているなら、結婚している子供たちを受け入れているように、わたしたちを受け入れてよ。」

●ある青少年は親の指示や圧力に反発して言います。「ぼくをほんとうに愛しているなら、強要しないでよ。」

これらの例では、戒めを破っている人が、親の愛は神の律法の戒めや両親の教えに優先すると主張しています。

次の二つの例は、神の愛の効力についてのこの世的な混乱を示しています。

●ある人が、来世で家族関係を享受するために夫婦は永遠の結婚をしなければならぬという教義を拒否して言います。「神がほんとうにわたしたちを愛しておられるなら、そのことで夫と妻を引き離すことはないと思います。」

●またある人が、神が個人や人種に苦しみ及ぶのをそのままにしておられることで自分の信仰が損なわれたと言い、次のように断言します。「わたしたちを愛する神がおられるなら、こんなことは起こらないでしょう。」

これらの人々は永遠の律法を信じていません。それが、神の愛のもたらす効力についての自分たちの考えに添っていないからです。この立場を取る人々は、神の愛の本質や神の律法と戒めの目的を理解していません。神の愛は神の律法と神の戒めを取って代わるものではありませんし、神の律法と戒めの効力は、神の愛の目的と効力を減ずるものではありません。親の愛と規則についてもまったく同じです。

II.

まず、神の愛について考えてみてください。このことについて、ディーター・F・ウクトドルフ管長は今朝非常に意義深い話をしました。「だれが、キリストの愛からわたしたちを離れさせるのか」と、使徒パウロは問いかけています。艱難、迫害、危難、剣ではありません（ローマ8：35参照）。パウロは語っています。「わたしは確信する。死も生も、天使も支配者も、……力あるものも、……その他どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのである。」（38－39節）

使徒ヨハネが述べた言葉以上に、神の愛には無限の力があり完全であることを立証するものではありません。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。」（ヨハネ3：16）別の使徒は、神は「ご自身の御子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡された」と記しています（ローマ8：32）。天の御父が、御子を遣わし、わたしたちの罪のために理解できないほどの苦しみに耐えるようにしたとき、どれほどの悲しみをお感じになったか、考えてみてください。それは、御父がわたしたち一人一人を愛しておられることの最大の証拠です。

神が御自分の子供たちを愛しておられるというのは、永遠の事実です。しかし、なぜそれほど愛して下さり、なぜわたしたちはその愛を願うのでしょうか。その答えは神の愛と神の律法の関係の中にあります。

神の愛は無条件で深いものだから、神の律法に従わなくても憐れみによって赦していただける、だから神の愛には価値があるのだと考えている人もいます。それとは対照的に、神の子供たちのための神の計画を理解している人は、神の律法が不変であることを知っています。この事実は、神が子供たちを愛しておられることのもう一つの大きな証拠です。憐れみは正義から奪えませんが、2 憐れみを受けるのは「聖約を守り、戒めに従ってきた」人です（教義と聖約 54：6）。

わたしたちは聖書と現代の聖典で、悪人に対する神の「怒り」3と、神の律法に背く者に神の「怒り」4が下された事例を何度も読んでいます。怒りは神の愛をどのように示しているのでしょうか。ジョセフ・スミスは、神は「〔御自分が地球へ送られた霊たちが〕御自分のように進歩する特権にあずかるように律法を定め〔られた〕」と教えました。5 神の愛は完全であり、そのために神は愛を込めて、戒めに従うことを求められるのです。なぜなら律法に従うことよってのみ、わたしたちは、神が現在完全であられるように完全な状態に変われるからです。この理由で、神の怒りは神の愛を否定するものではなく、神の愛を立証するものなのです。すべての親は、子供の自滅的な行為を建設的に怒り、失望しながらも、同時にその子供を完全に愛せることを知っています。

神の愛は普遍であるため、その完全な計画によって、御自分のすべての子供に、律法に不従順な者にさえも、多くの賜物を授けておられます。現世の生涯も一つの賜物であり、天での戦い6で資格ありとされたすべての者に授けられます。もう一つの無条件の賜物としては、万人の復活があります。「アダムにあってすべ

ての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである。」（1コリント15：22）そのほかこの世の賜物の多くは、個人が律法に従うかどうかとは無関係です。イエスが教えておられるように、わたしたちの天の御父は、「悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さるからで〔す〕。」（マタイ5：45）

わたしたちは耳を傾けさえすれば、神の愛を知り、感じることができます。不従順なときでさえそうです。最近教会に戻って活発になったある女性が、聖餐会で次のように述べました。「わたしが神を拒んでいたときも、神はいつもわたしのそばにいてくださいました。神はいつもわたしを導き、あらゆるところで深い憐れみをもって慰めてくださいました。でもわたしの怒りは大きすぎたので、様々な出来事や感情を神の愛としてとらえることも受け入れることもできなかったのです。」⁷

III.

神の選りすぐりの祝福が神の律法と戒めに従うときに与えられることは明らかです。現代の啓示から重要な教えを学べます。

「創世の前に天において定められた不変の律法があり、すべての祝福はこれに基づいている。

すなわち、神から祝福を受けるときは、それが基づく律法に従うことによるのである。」（教義と聖約130：20-21）

この偉大な原則は、多くの事柄の理由を理解する助けになります。例えば、贖罪によって正義と憐れみの均衡が保たれる理由や、神の子供たちが選択の自由を行使するのを神が妨げようとなさない理由も説明できます。選択の自由、すなわち選択する能力は、わたしたちをこの世にもたらした福音の計画にとって必須のもので、神はある人の選択の結果を妨げてほかの人の幸福を保つようなことはされません。彼らが殺し、傷つけ、迫害し合うときでさえそうです。そうすることは、永遠進歩のための計画を損なうことになるからです。⁸ 神はわたしたちがほかの人々の選択の結果に耐えられるように、祝福してくださいます。しかし、その選択を妨げることはなさいません。⁹

イエスの教えを理解している人であれば、愛にあふれた天の御父と神の御子が愛は戒めにとって代わると信じておられるなどと結論づけることはあり得ません。次の例を考えてみてください。

イエスが業を始められたときの最初のメッセージは、悔い改めでした。¹⁰

イエスは姦淫を犯した女性を責めないで優しく憐れみを示しただけでなく、「お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように」と告げられました（ヨハネ8：11）。

イエスはこう教えておられます。「わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、

みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけが、はいるのである。」（マタイ7：21）

神の戒めと律法の効力が大衆の行為や要望に添うように変更されることはありません。神の愛や親の愛というものはたとえ愛する者が律法に従わなくてもそれを容認するものだと考えている人は、愛も律法も理解していません。主はこう宣言しておられます。「律法を破って律法に従わず、自らのために律法になろうとし、罪の中にとどまることを望み、そして完全に罪の中にとどまるものは、律法によっても、また憐れみや公正、公平によっても聖められることはあり得ない。それゆえ、彼らはなお汚れたままでいなければならない。」（教義と聖約 88：35）

現代の啓示にこうあります。「すべての王国には律法が与えられている。」（教義と聖約 88：36）例えば次のようなものがあります。

「日の栄えの王国の律法に従えない者は、日の栄えの栄光に堪えられないからである。

また、月の栄えの王国の律法に従えない者は、月の栄えの栄光に堪えられない。

また、星の栄えの王国の律法に従えない者は、星の栄えの栄光に堪えられない。」（教義と聖約 88：22-24）

つまり、最後の裁きにおいて、どの栄えの王国に行くかが決められる際には、愛によってではなく、「神のあらゆる賜物の中で最も大いなる」永遠の命に人を備えるために神が定められた律法によって決められるのです（教義と聖約 14：7）。

IV.

両親には、子供たちに教え、答える際に、これらの原則を応用する機会がたくさんあります。親が子供たちに物を与えることも、そのような機会の一つです。神がこの世の子供たち全員にお与えになる賜物の中には、律法に従うことを条件としないものもあります。同じように、両親は、たとえ子供たちが親のすべての要求に応じなくても、住まいや食物のようにたくさんの物を与えます。しかし、知恵と愛に満ちた天の御父は、子供たちに律法と戒めを与えてこられました。その模範に従って、賢明な親は従順を条件として、子供たちに物を与えます。

アルコール飲料や薬物にふけている 10 代の若者など、わがままな子供を持つ親は、深刻な問題に直面しています。親は愛をもって、家庭内にこれらを持ち込んで使用することを容認することが必要でしょうか。それとも、その行為の違法性や深刻さ、ほかの子供への影響を考えて、禁じる必要がありますか。

もっと深刻な問題として、もしも成人している子供が同棲をしている場合、その子供は、婚姻関係外での性的関係という事態の深刻さゆえに、家族から縁を断たれて、家族の非難の重さを感じる必要がありますか。それとも、同棲生活という事実を目をつぶる親の愛が必要でしょうか。わたしはこの極端な状況を両方見たことがあり、両方とも不適切であると思っています。

親はどこに線を引くでしょうか。それは親が主の靈感によって導かれ、知恵を用いて決める事柄です。親にとって、子供を育て、家族を治めるときの決断以上に、天の導きを必要とする事柄、あるいは導きを受けることのできる事柄はありません。これは永遠の務めです。

両親はこれらの問題に取り組むとき、99匹を残して行方の知れない羊を救うために荒れ野に出て行くという主の教えを思い起こさなければなりません。11 トーマス・S・モンソン大管長は、恐れや無関心や無知の荒れ野をさまよっている兄弟姉妹を救い出す愛の十字軍を求めました。12 これらの教えは、愛をもって関心を示し続けることを求めています。それには、愛をもって関係を継続することが求められます。

親はまた、主が頻繁に教えられた「主は愛する者を訓練〔される〕」（ヘブル 12：6）13 という言葉を覚えておくべきです。ラッセル・M・ネルソン長老は以前、大会で忍耐と愛についてこう教えました。「罪人に対する真の愛とは、黙認することではなく、勇気をもって彼らと対峙することです。真の愛は、自滅的な行為に力添えするものではないのです。」14

愛の力と律法の力の間に線を引く場合にはいつでも、戒めを破れば、愛のある家族関係に必ず影響が及びます。イエスはこう教えておられます。

「あなたがたは、わたしが平和をこの地上にもたらすためにきたと思っているのか。あなたがたに言うておく。そうではない。むしろ分裂である。

というのは、今から後は、一家の中で五人が相分れて、三人はふたりに、ふたりは三人に対立し、

また父は子に、子は父に、母は娘に、娘は母に、しゅうとめは嫁に、嫁はしゅうとめに、対立するであろう。」（ルカ 12：51-53）

この衝撃的な教えは、一致して神の戒めを守る努力を怠れば家族が分裂することを思い起こさせてくれます。愛する人との関係が損なわれないように、できることをすべて行いますが、それでも分裂してしまうことが時折あります。

そのようなストレスの中で、愛する人が道を踏み外せばわたしたちの幸福も損なわれるという現実には耐えなければなりません。しかし、互いへの愛や、神の愛と神の律法をともに理解するための努力を惜しんではなりません。

わたしはこれらの事柄が真実であると証します。これらは救いの計画とキリストの教義の一部です。わたしはキリストについて証します。イエス・キリストの御名により、アーメン。

注

1. ラッセル・M・ネルソン「神の愛」『リアホナ』2003年2月号、12 参照

2. アルマ 42 : 25 参照
3. 例として, 士師 2 : 12-14 ; 詩篇 7 : 11 ; 教義と聖約 5 : 8 ; 63 : 32 参照
4. 例として, 列王下 23 : 26-27 ; エペソ 5 : 6 ; 1 ニーフアイ 22 : 16-17 ; アルマ 12 : 35-36 ; 教義と聖約 84 : 24 参照
5. 『歴代大管長の教え—ジョセフ・スミス』 210
6. 黙示 12 : 7-8 参照
7. 2005 年 12 月 6 日付けの手紙, 著者所有
8. アルマ 42 : 8 と比較
9. モーサヤ 24 : 14-15 と比較
10. マタイ 4 : 17 参照
11. ルカ 15 : 3-7 参照
12. トーマス・S・モンソン「迷える大軍」『聖徒の道』1987 年 9 月号, 3 参照
13. 箴言 3 : 12 ; 黙示 3 : 19 ; 教義と聖約 95 : 1 も参照
14. 「赦しと愛とを持たしめたまえ」『聖徒の道』1994 年 7 月号, 75 参照